「自助」・「共助」・「協働」の精神を身につけ、
地域の安全に役立つことのできる生徒の育成

学校名　佐伯市立米水津中学校

Ⅰ　学校の規模及び地域環境

１　学校規模

学級数３　　生徒数４２人　　職員数１０人

２　地域環境

米水津は大分県の南東部に位置し、旧佐伯市、旧鶴見町、旧蒲江町に隣接し、東は豊後水道を隔てて四国の愛媛県に相対する。北は九州の最東端鶴見崎、南はキシメキ崎に抱かれ、米水津湾を望み、海岸部に５つの大字と１つの小字の６集落が点在している。

本校はその米水津地域のほぼ中間地点に位置し、海に隣接している。

Ⅱ　取組のポイント

各教科や総合的な学習の時間を通して、米水津地域の特性や防災・減災の知識・技能を学び、被災後の生活を考えることによって、地域の安全に役立つことのできる生徒の育成を中心に取り組んだ。

【１】地震や津波に関する正しい知識を身につけ、避難訓練等を通して自らの命を守るためにどのような行動をとるべきかを考える。

【２】教育キャンプや防災キャンプを通して、被災後の生活で役立つ知識や技術を学び、避難所での中学生の役割等を考える。

【３】東北被災地研修を通して、自然災害の脅威を肌で感じ、また復興のために人々が努力している姿を目の当たりにすることによって、被災した場合に、他の人々や地域の安全を支えるために、自分たちに何ができるのかを考える。

【４】被災地でのボランティア活動を経験された方の講演を聞き、被災された方々の思いや願いに接することにより、自分たちに何ができるのかを考える。

Ⅲ　取組の概要

１　取組の趣旨やねらい

今後発生が予想される南海トラフ巨大地震では、佐伯市では最大震度６強、最大津波高１５ｍ、到達時間は早い所で１８分が予想されている。米水津でも、過去に宝永(1707 年)と嘉永(1854 年)の２度にわたり、南海トラフを起因とする地震によって津波の被害を受けたことが江戸時代の村の記録に残されている。また、米水津内の間越地区の池や、浦代地区の寺の石段にそのときの津波の堆積物や痕跡が残されている。

南海トラフ巨大地震が発生した場合、本校周辺部では１ｍ高の津波が２８分程度で到達し最大津波高１２ｍ規模の津波が３６分程度で到達することが予想されている。海に隣接する本

校も甚大な被害が想定される。更に、通学路についても、リアス海岸のため、道路から急傾斜で山と接する地形であり、学校から集落までの間に避難経路・場所として利用できそうな箇所が少ない。

そのため、生徒の登下校中、家庭生活、休日等における津波対策を考えると、保護者・地域と連携した防災・減災対策も必要になる。

２　取組の内容・方法等

（１）避難訓練　（地震・津波）

第１回避難訓練を、４月１５日（金）に実施した。この日は前日に熊本地震の前震があった日で、生徒は緊張感を持って取り組んでいた。学校防災アドバイザーで大分大学准教授の小林先生も参加されて、アドバイスをいただいた。本校の運動場、校舎等は海を埋め立てた土地の上に立地しているため地震で液状化する心配があること、避難場所の梅谷林道は地震で土砂崩れの心配があるため必ずしも適当な避難場所ではないこと等、指摘していただいた。ただし、短時間での垂直避難を考えると近くの地区避難所よりも早く高い地点に到達できるという利点がある。

第１回避難訓練を皮切りに、９月１日（木）には通常授業中、９月２３日（金）には部活動練習中と夜間活動中、９月２４日（土）には下校中と、様々な場面を想定した避難訓練を実施した。

（２）地域の津波の避難場所、避難行動の確認　（全校集会）

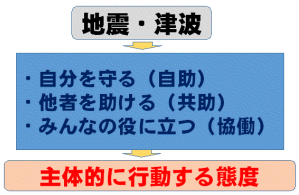
４月２０日（水）に行われたＰＴＡ総会の中で、保護者から、登下校中に地震・津波が発生した場合の避難について心配する声が上がった。

生徒や保護者の心配を軽減するため、翌２１日（木）の放課後に全校集会を開き、防災教育の担当者が、地区内の避難場所を一覧にした資料を配布し、津波の避難場所と避難行動について確認した。

（３）防災教育のガイダンス

５月１８日(水)、生徒に対して、今後の防災教育について見通しを持ってもらうため、『今後の防災教育の進め方』というタイトルでガイダンスを行った。

地域の、これまでの防災の取組を振り返りながら、これから中学校としてどのようなことに取り組んでいくのかを説明し、「みんなで知恵を出し合って思いを伝え合う」取組にすることを確認した。



（４）防災講演会

ア　４月１５日(金)、第１回避難訓練終了後に、学校防災アドバイザーの小林准教授より、生徒を対象に防災についての講演を行っていただいた。『災害への備えと姿勢』という演題で、前日の熊本地震前震を題材に、日頃の心の準備の大切さについてお話をしていただいた。その中で、「危ないかもしれないが大事」「疑わしき時は行動せよ／最悪事態を想定して行動せよ／空振りは許されるが見逃しは許されない」「知識と体験のバランスが大切」という言葉が印象に残った。

イ　５月３１日(火)、ＪＲＣ(青少年赤十字)の指導者に来ていただき、全校生徒を対象に救急救命講習を実施した。熊本地震でのボランティア活動の様子を映像で見た後、生徒は実際に人工呼吸や心臓マッサージ、ＡＥＤの取り扱いを学んだ。実際に体験することによって、もしもの時に役立つ知識や技能を身につけることができ、生徒にとって有意義な活動であった。

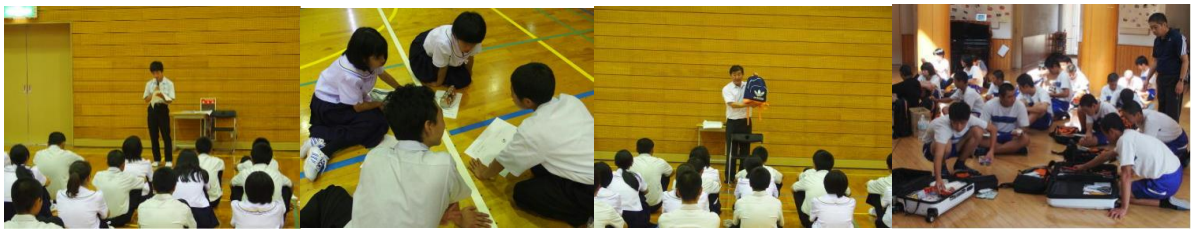
ウ　６月１６日(木)、宮城県でのボランティア活動に取り組んでいる市役所職員の柴田真佑さんを講師に招き、第２回防災講演会を実施した。保護者や地域の方にも呼びかけたところ、４０名あまりの参加があった。現地での映像を交えながら熱く語る柴田さんに生徒も引き込まれ、心を動かされた様子であった。

エ　７月１９日(火)、岩手県や熊本県で、被災地ボランティア活動に取り組んでいる佐伯市立鶴見中学校の石田周一教諭を講師に招いて、講演会を実施した。クイズ形式で防災のことについて考えたり、被災地の方が詠まれた短歌を紹介してもらったりと、生徒にとって防災を身近に感じ、深く考えることのできる時間となった。

オ　９月２６日（月）、佐伯市立上入津小学校の渡邉和彦校長先生による「生き方講演会」を実施した。自身の少年期、青年期の体験を通して、人生の上で、困難なことに直面した際に、負けない、くじけない生き方をすることの大切さについて話をしていただいた。万一、被災した場合、どのような生き方をすればよいか考えるきかっけになった。生徒は一生懸命、渡邉校長先生の話に聞き入っていた。

（５）米水津を襲った津波の学習と第１回防災リュックの中身の検討

６月２２日(水)、地域の方が作成した資料を利用して、江戸時代、２度にわたって、米水津を襲った「宝永」と「嘉永」の津波について学習した。その後、防災リュックに常備しておくべきものについて、グループごとに思考ツールを利用し考えた。



（６）第２回防災リュックの中身の検討

７月２０日(水)に、以前グループで考えた防災リュックの中身について、再度、思考ツールを利用して何が本当に必要なのかを考えた。生徒はリュックの中身を準備する段階だったため、とても真剣に取り組んでいた。

（７）教育キャンプ防災プログラム

８月２日（火）・３日（水）の一泊二日、宮崎県延岡市の『むかばき青少年自然の家』で教育キャンプを実施した。

施設のプログラムの中に防災プログラムがあり、夕食の食器から食材まで全て自分たちで準備する活動に取り組んだ。竹を使ってはしを作り、食材の魚も川から手づかみで捕まえた。火も自分たちでおこし、空き缶を飯ごうがわりに米を炊く活動も経験した。

（８）東北被災地研修

８月２２日（月）～２４日（水)、二泊三日の行程で宮城県での被災地研修を実施した。この研修に応募した生徒１３名と職員４名の計１７名で宮城県を訪問し、被災地の見学や石巻市立湊中学校との交流会、雄勝町でのボランティア活動を体験した。

事前・事後には、佐伯市長を表敬訪問し、出発の決意と研修報告をそれぞれ行った。

（９）防災キャンプ

９月２３日（金)・２４日（土)、生徒が災害について学習し、いざという場合の対応方法を実習することで、自分の命を守る力を身につける活動、避難所開設実習や屋外での炊き出しなど、災害発生時に想定される状況を擬似体験できる学習機会を提供し、防災意識の高揚を図ることを目的に、一泊二日で防災キャンプを実施した。

(10) 公開研究発表会

１２月２日（金)、本校で開催し、当日は、生徒・保護者・地域の方々、市内外からの教職員約１２０名が参加した。各学年の生徒と被災地研修参加生徒がこれまでの学習成果を発表するとともに、全校生徒で考えた「市への５つの提言」も発表した。また、生徒・教職員・保護者・区長・振興局長の９名をパネラーに「子どもと大人で米水津の防災を考える」パネルディスカッションも実施した。特に、パネルディスカッションでは、学校・家庭・地域・行政が、それぞれ実際に取り組んでいる防災･減災の取組について知ることができた。また、保護者・地域が中学生に期待することや望むこと、「市への５つの提言」に対する行政からの回答を聞くことができた。

３　実践の成果

（１）防災教育について

教科・領域、総合的な学習の時間全般にわたって、防災の視点を生かした実践が増えて、生徒も意欲を持って取り組む様子が見られるようになった。

防災や減災に関わる知識や技能を習得することで、災害に見まわれても冷静に、臨機応変に対応できる力や生き抜く力が育ってきていると感じる。また、生徒の防災に対する意識も確実に向上している。

（２）学校防災マニュアルについて

昨年度、防災アドバイザーのアドバイスを反映させるため、内容を見直した。職員の災害時の動きをフローチャート化できたのでよかった。

（３）避難訓練について

現時点までで４回の避難訓練を実施している。場面設定や避難場所に変化を持たせて、生徒が柔軟に対応できる力を伸ばせたのではないかと考える。マンネリ化して訓練のための訓練にならないような工夫を今後も続けていきたい。

（４）地域との連携について

今回、実践委員会を立ち上げたことによって地域の自治会とのつながりが深まり、学校の活動への理解が深まるよい契機となった。また学校にとっても、地域の防災への取組を理解するよい機会となった。

家庭においても防災について考えるきっかけになったのではないかと考える。学校も含めて、地域全体の防災意識が高まっていくことを願っている。

４　課題等

（１）防災教育について

この取組を継続することが大切であると思う。来年度以降、防災学習を学校の特色ある取組として位置付けて、多くの保護者、地域を巻き込む活動を仕組んでいく必要がある。

（２）地域との連携について

ア　生徒が、一日の生活の中において、学校で過ごす時間は１０時間程度である。残りの時間は家庭や地域で過ごすことを考えると、当然、学校外でも活用できるような避難訓練でなければいけない。家庭や地域と連携して、様々な場面を想定した訓練を実施する必要がある。

イ　避難所開設を想定し、中学生が果たす役割を地域と共に考えていく必要がある。

（３）幼・小・中の連携について

小学校が統合され、小・中一貫教育の充実が求められる中、幼・小・中１１年間を見通した防災学習プログラムをつくっていく必要がある。